安来ドライビングメッセージ／Driving Message

～一五分間で語る、安来の古代～

朝夕の渋滞やゴールデンウィークの超渋滞現象が起こっていた、安来市内を中心とする国道九号線も、米子から松江にかけて開通した自動車専用道路のおかげで、道路事情はかなりよくなった。

この道路を造るさい、安来市の発掘調査を担当したブンタは、休日を利用して、友達のマイと蒜山高原までドライブに出かけた。蒜山の自然を満喫した二人は松江に向かい、米子自動車道を走り、帰路についた。買ったばかりの愛車は快調に走り、米子バイパスを通り抜けた。行きは国道九号線で安来市を抜けたが、帰りはできたばかりの高速を走ることにした。米子市を抜け、島根県にはいると、いよいよ高速道路だ。

「初めて走る道路だけど、なんか懐かしいなあ。」

「どうして？」

「ぼく、この道路を造るまえに、このあたりの発掘調査をしてたんだよ。八年間もかけて調べてたんだもんな。血と汗と涙のしみこんだ、青春の発掘現場なんだぜ。」

「キミはいつも大げさなんだから。でも八年も調べたんなら、いろんなことがわかったでしょ。」

「よくぞ聞いてくださった。それでは聞かしてあげやしょう。」

「ハイハイ。」

車はインターチェンジのゲートをくぐった。

「ここから先が、島根と鳥取の県境。安来市でもっとも東になるんだ。一五〇〇年も前の古代から国と国の境はあったらしいけど、やっぱりこのあたりが出雲の国と伯耆の国の境だったようなんだ。」

「でも、そんなことは『出雲国風土記』を見ればわかるじゃないの。」

『出雲国風土記』は七三三年に書かれたものだろ。それ以前のことは、文書には残ってない。だから発掘の成果は重要な資料になるんだよ。発掘発見があったんだ。いま走ってる所はもとは高い山だったんだけど、その頂上に何軒かの家があったんだよ。それもちょうど、邪馬台国ができるころ、国同士が戦いをしていたころにね。

「そうか、ここらは出雲の国の境で見晴らしもいいから、見張りにはもってこいね。」

「それに、古墳時代になって近畿地方が日本の中心地になってからは、技術や文化も中国大陸から近畿地方を経由して島根にもやって来るようになったんだ。それがもっとも早く伝わったのが、この地域なんだよ。」

「たとえば？」

「須恵器って知ってる？　弥生土器に比べて固くて青い色をした焼き物なんだけど、これを作るときに使った窯が見つかったんだよ。しかも島根県ではもっとも古い窯で、この近くを探せばまだいくつもあるようなんだ。このあたりで、かなり大規模に須恵器を作っていたんだよ。それに、当時としては貴重だった鉄を使って、鍬や鎌を作る仕事もしてたことがわかっているんだ。」

「じゃあ、今で言う工業地帯ってところね。」

緑色の案内標識が、安来のインターチェンジが近くなったことを示した。

「安来インターチェンジがある所は、佐久保と言うところなんだけど、ここは出雲ドーム五個分の面積を発掘したんだ。」

「へー、そんなに広い所を発掘することって、めったにないんじゃないの？」

「そう。夏は暑くて大変だったけど、山の斜面からたくさんの横穴墓が見つかったんだ。古墳時代の中ごろから終りにかけて、全国的に造られる墓なんだけど、このあたりはどうも、安来市に住む豪族の墓を造る地域だったようなんだ。それに、ちょっとおもしろいこともわかったんだよ。」

「おもしろいことって？」

「同じ安来地域なのに、川をへだてて墓の造り方が違ってるんだよ。もうすぐ飯梨川を越えるけどね、その川の西側、つまり荒島では石棺式石室という荒島石を使ったしっかりした墓を造るんだけど、同じ時期になぜか東側は石棺式石室は一つもなくて、簡単な横穴墓しかないんだよ。しかもその横穴の形が、石棺式石室をまねているんだ。」

「東側の豪族は、石棺式石室が造りたくても造れなかったのかしら。川をへだてて東と西で対立してたのかなあ。」

「この両地域は、古墳時代の初めごろから、おかしな現象があるんだよ。古墳ってのは、大和政権が国内の豪族を支配するときに働きに応じて与えられた勲章みたいなものだってことは、このまえ話したよね。」

「前方後円墳がトップで、つぎが前方後方墳、円墳、方墳っていう順番だったわよね。」

「そのとおり。飯梨川の西には前方後円墳がないのに、なぜか東にはあるんだ。その代わり西は方墳なんだけど、でかいものが多い。東は前方後円墳だけと比較的小さい。川をへだてて、こんなに違うんだよ。」

「どうして？」

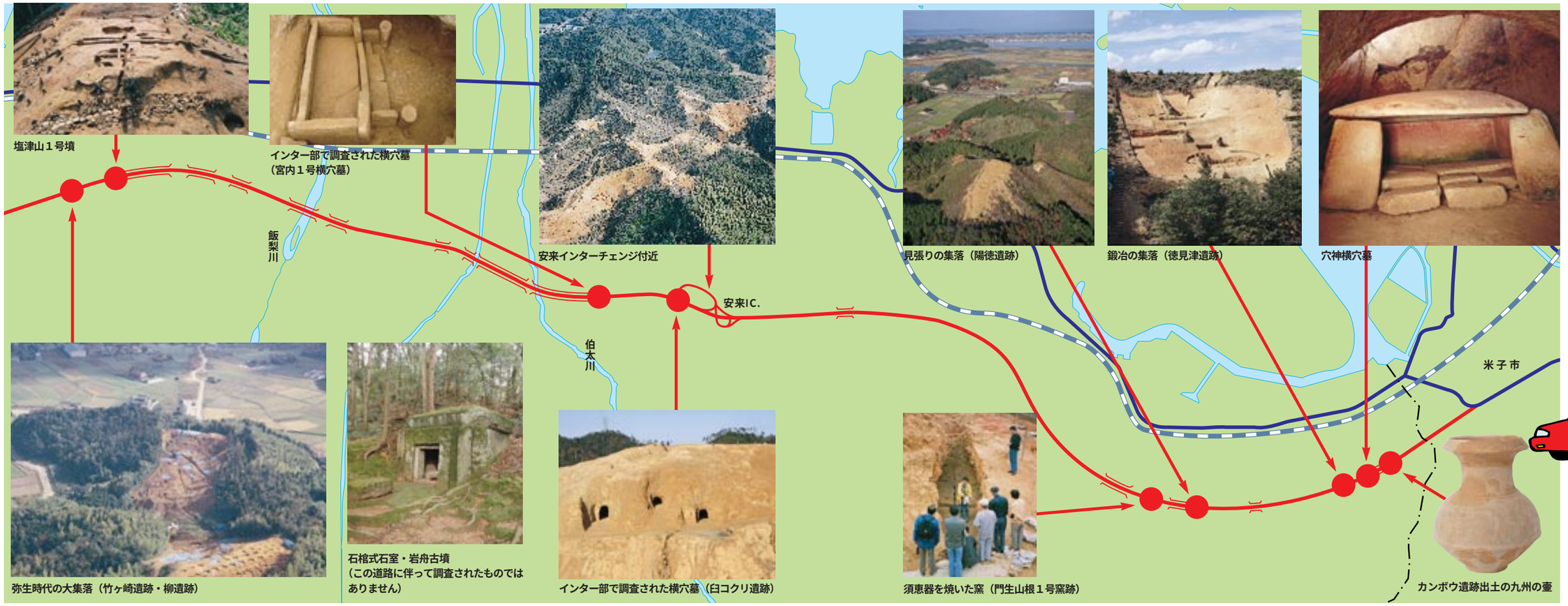
「どうやら、このナゾは弥生時代にまでさかのぼりそうなんだ。もうすぐ見えてくるけど、西側の荒島は古墳時代直前まで、出雲地方の中心地の一つとして、四隅突出型墳丘墓という独特な墓を造り、大きな勢力を持ってたんだ。それが大和朝廷の時代になったとたん、四隅突出型墳丘墓は消えてしまうんだよ。その代わりに方墳が登場する。」

「なぜかしら？」

「くわしいことは、『いにしえの島根ガイドブック』二巻に書いてあるから、読んでごらんよ。」

二人の話が盛り上がっているあいだに、車は飯梨川を渡り、安来市西部にはいった。

「このあたり、荒島には弥生時代の終りから古墳時代にかけての豪族の墓がたくさんあるんだ。塩津山一号墳って言う古墳も、このときの調査で見つかったんだよ。すぐそばには一〇〇軒以上から成る弥生時代の大集落の跡も見つかったりして……。おっと、もう荒島を通りすぎてしまったよ。やっぱり高速道路は速いねえ。安来の発掘では話したいことがまだまだあったし、この先の東出雲町でもたくさんのことがわかったんだ。その話は次回ということで、それではいよいよ二人の愛について語ろう……、ちょっと、マイちゃん。肝心なところで居眠りするなよ～。トホホ……。」



調査ではここらへんが国境だったということは確認できたんだけど、どうやら時代によって国境が動いていたこともわかったんだ。」

「どうしてそんなことがわかるのよ。」

「墓が教えてくれたんだ、と言っても、墨とかじゃないよ。墓の形や造り方が、出雲と伯耆とでは違うんだよ。道路の高架下に残っている神代塚は、伯耆の国の特徴を持つ墓なんだ。今から一六〇〇年ぐらい前は、伯耆の国だったってことだよね。でもその数一〇年後になると、神代塚の近くにある穴神横穴墓という墓、そうそうこの墓は石の棺に絵が書いてあるって新聞やテレビで報道されてたけど、その穴神横穴墓は出雲の造り方になっている。」

「古代からこのあたりは、国境として出雲と伯耆の間で、複雑な立場だったかもね。」

「それだけじゃないよ。出雲の国にとっては、このあたりがあらゆることの先進地域だったんだよ。」

「どういうこと？」

「二二〇〇年くらい前、弥生時代のことだけど、そのころは中国や朝鮮半島の文化を取り入れていた九州地方が、日本でもっとも進んだ技術を持っていたんだ。その九州地方の土器がこのあたりから出たんだよ。これは、島根県では珍しいことなんだ。」

「九州の人と独自に交流をしてたのかもね。近くに中海があるから、船で行き来したりして。」

「おっ、センスいいねえ。中海というのは交通の要所だったんだ。いま弓ヶ浜は半島になってるけど、古代は米子の先のほうが海になっていて、弓ヶ浜半島は島だったんだよ。だから安来の人からすると、出雲の国に来る船は、目の前を通るわけ。」

「と言うことは、このあたりは見張りをするのにも最適ね。」

「鋭いなあ。見張りと言うことでは、おもしろい